

米国における新大統領の就任演説は、今後4年間の政策の基本哲学を内外に明確に打ち出すものだ。米国は世界最大の経済大国であり、貿易・投資・金融の中枢を占めていることから、世界経済の今後を考えるうえで重要な指針となる。米国経済の自律反転が世界の動向を左右する

を鼓舞するというより、具体的問題に即した実践的内容を述べている。演説を一つの言葉で象徴させる手法をとらなかつたので、新聞の見出しも「新たな責任の時代」「国民の信頼と決意」などと焦点の当て方はさまざまであった。国民の圧倒的な支持を背景に、経済政策では政府と国

いのはインフラの建設、科学技術、医療、環境、教育など新政権の経済課題を述べた後でのくだりで、「今日われわれが問うことは、われわれの政府が大きすぎるのか小さすぎるのかではなく、政府（の施策）が有効かどうかだ（中略）。その答えが是であれば施策を実施しよう。もしその

に支出し、悪い習慣を改め、白日の下で仕事をやる。そうすることによつてのみ、国民・政府間の強い信頼を回復することができるところからである」というくだりなどは、わが国の年金記録問題、さらには社会保障制度全般への取り組みの姿勢としても大いに参考とすべきだろう。

## 「オバマ演説に見る民主主義の成熟度

ことは明らかであり、オバマ大統領がどんな言葉で米国が目指す将来を語るのか、米国のみならず全世界が注目した。

演説そのものは、選挙期間中に見られた「Change, や Yes, we can」といった印象的な言葉で聴衆

民が何をなすべきかという大きな方向を「苦い薬」の部分も含めて冷静に丁寧に語つたものだと言えるだろう。

それだけに詳細に内容を読むと、新大統領の考え方や姿勢が浮かび上がってきて大変興味深い。注目した

答えが否であればプログラムは終了させる」と明言している部分である。

大きな政府か小さな政府かという、わが国でもありがちな、不毛な議論に陥りやすい問題設定を退け、問題解決に当たり政府の役割がブラ

スなのかどうかを問う姿勢が示されている。政府が登場すると有害な分野があることを認識したうえで、その分野からは政府は撤退するとはつきり言っている。「緊急事態だから何でも政府に依存しよう」という、今や日本だけでなく世界に広がっている安易な風潮に対する痛烈な警告である。

さらにその後には「公金を扱う人間は収支説明の責任を負う。賢明

将来の世界にこう伝えよう、厳寒の中、希望と美德だけが生き残れるとき、共通の危険に目覚めた町や国はこれと戦つた——を引用し、今の米国が当時と同じ危機的状況にあることを鮮やかに想起させた。

そして国民を独立軍兵士に見立て、建国の理想を忘れずに悲惨な状況を切り開いた彼らの勇気に倣ってひるまずに困難と戦おう、それを将来世代にも語り継げるようにと訴えた。

規律と情熱、あくまで冷静で透徹した理性を持ちながら、高いモラルを掲げて国民とともに危機の時代を乗り切ろうという、あるべき指導者の資質をそこに見る。民主主義の成熟度の彼我の差をまざまざと見せつけられた一瞬であった。

## 経済を見る眼

今週の眼

早稲田大学大学院ファイナンス研究科教授  
川本裕子



かわもと・ゆうこ ●東京大学卒、英オックスフォード大学経済学修士。金融審議会委員。大阪証券取引所、マネックスグループ、リそなHDの社外取締役、東京海上ホールディングスの社外監査役を務める。